街道を歩く

東海道：08矢作橋ー宇頭ー今本町

岡崎から知立までは小田原ー箱根4里8町、見付ー浜松、大磯ー小田原に次ぐ長い区間であったのでこの間には宇頭茶屋（現宇頭茶屋町）、大浜茶屋（現浜屋町）の茶屋があった。両茶屋共に”長休め”と称し旅人を泊め宿場に近い活況をしていたので幕府は宿場が寂れるとして宿泊禁止令を出していた。

[弥次・喜多]矢矧橋を渡って

”欄干は弓のごとくに反橋や
これも矢はぎの川にわたせば”

今村の立場茶屋にて要領よく”うずらやき”買う

”わずかでも欲にはふけるうずらやき
三もんばかりのちゑをふるひて”

誓願寺（浄土宗）

源義経と矢作の兼高長者の娘浄瑠璃姫の悲話を伝える寺、本堂には義経と浄瑠璃姫の木像、境内に長者と姫の墓、長者が娘の菩提所として建てた十王堂、芭蕉の句碑 古池や蛙飛び込む水の音” 等がある。5月8日より3日間”花の塔”祭りで賑わう

矢作の里の兼高長者に薬師十二神から授かった。美しい浄瑠璃姫がいた。源義経が奥州へ向う途中長者の家に宿を求めた、その夜姫の奏でる琴の調べに誘われ母の形見の名笛”薄墨”を吹いた琴と名笛の調べは1つになりその夜二人は結ばれた。義経は名笛を姫に授け奥州へ、姫はその後を追うが果たせず、その後住まいを笹谷（岡崎城近く）に移す悲しみのあまり菅生川（乙川）に身を投じ17歳の生涯を終える。寿永2年(1183)

勝蓮寺

親鸞聖人の柳堂、説法石、御腰掛石および家康の長男三郎信康の唯一の肖像画が残る門前南に一里塚が在ったというがその面影はない

浄瑠璃姫の墓

明治川神社

祭神：大水上神（讃岐の国神、灌漑）、水分神（川水の適宜分流分配）
タカオカミ神（山頂の竜神、降雨）と用水工事に尽力した。
都築厚弥命、伊豫田與八郎命、岡本兵松命
都築厚弥は文化5年から代官を務め、先祖代々酒造業を営む。文化14年(1816)水不足の時代官を辞め矢作川から水を引く計画を立て測量を始め、掘削直前で逝去。その30年後伊豫田與八郎、その後岡本兵松が受け継ぎ完成させる。

永安寺

門前の石碑”柴田助太夫終焉の地”
同村の開祖云われる柴田吉兵衛の子孫で庄屋を営んでいたが延宝5年（1677）”助郷役受け難き趣出願仕り候・・。”と直訴したため死罪。村民が旧屋敷に草庵を建て供養する。
境内に見事な雲龍松がある。樹齢300年と云う。

和志取神社

祭神：五十狭城入彦命(いさきいりひこ)
景行天皇が美濃へ行幸の時八坂入彦皇子の娘、弟媛を娶って生まれた皇子とか（景行天皇には81柱の皇子がいたという）
応神天皇の時に神社に雑役奉仕していた。
大王生”が逃走したので五十狭城入彦命に探索を命じた。命は三河まで追跡、とらえる以後三河に住む。

両部鳥居が珍しい

矢作神社（祭神素盞嗚尊）

日本尊が東征の折りこの地来ると住民が賊に苦しめられている事を訴えた。日本尊は矢作部達に矢を作ること命じたが竹の生えている中州まで行けない。
突然一羽の蝶が人の姿になり竹を切とってこれで1万本の矢を作り、日本尊が神社に祈り賊を征伐した。以後矢作神社と云う
境内に新田義貞ゆかりの”うなり石”がある。
この辺は建武2年（1335)新田義貞の率いる6万の東征軍が高師泰の率いる20万の足利軍を破った”矢矧鷺坂合戦”歴史舞台。

和志山古墳

明治になって五十狭城入彦命御陵墓伝説地
確認以後宮内庁管理。
前方後円墳、長さ63m余、後円部高さ5．5m。